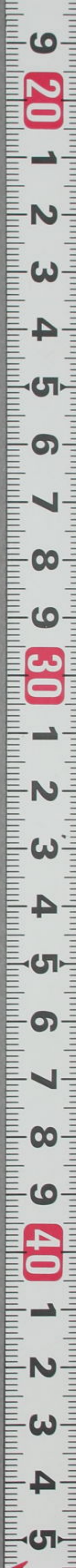




平篤胤大人日録

御自筆

特別
15
1916
2



勢 毎 之 彼 第 各 信 数 方
ヲ 方ノ 方ノ 方ノ 方ノ 方ノ 方ノ 方ノ 方ノ

川中嶋

天文二十三年

二度目

弘治二年

永禄四年

永禄九年

天文二十二年 十二月

弘治三年 西度

秋九月

車魚戦

門ニ在テ

兵業

八弟門

ニ於テ

芳休

八砲ヲ

元年

双三送リ

八十首

山家三

菅沼



勢列山田ノ住人村松芳休ト云フ者適ニ野田ノ城内ニ在テ
 毎夜笛ヲ吹ク其音精妙在故ノ敵軍喜ヒ聞ク一日兵集
 テ紙ヲ竹竿ニ掲テ丘上ニ建置ケルヲ城中鳥居ニ左米門
 之ヲ見咎メ疑ラシハ密ニ主将来テ笛ヲ聞ノ符ナラシクト
 彼竹竿ヲ標的ニシテ大砲ヲ備ヘ相待ツ所ニ其夜果シ芳休
 笛ヲ吹シカハ信玄彼丘上ニ来テ笛ヲ聞ク所ヲ鳥居大砲ヲ
 發シ其耳ノ際ヲ蚊吸リ打墮シ即絶入ス 廣記天正元年
 信玄ハ野田ヨリ菅沼新八郎松平与一郎ヲ長篠ノ城ニ送リ
 数日籠城飢渴ノ勞ヲ犒ヒ保養ヲ加ヘ味方ハ屬スヘキ旨
 ヲ説シト雖氏兩士聊カ丹心ヲ変セズ是ニ於テ去年山家三
 方ノ豪族築手ノ奥平監物貞勝同美作貞
 徳同九八郎信昌多嶺ノ菅沼



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '天正二十三年' and '野田'.]

刑部貞吉息
新三郎貞忠

長篠ノ管沼

新九郎
正貞

ハ神君ヲ叛キ信玄ニ属シ

其質子今ニ神君ノ方ニ在リ今度彼族信玄ニ乞テ曰ク

定盈忠正ヲ濱松城ニ歸シ吾輩ノ妻孥ヲ易ント云テ信

玄之ヲ諾シ且又神君ヨリ今川氏真ニ送リ玉フ酒井左衛

門尉カ根ヲ信玄先年氏真ヲ逐テ之ヲ壓ヘ取リ甲州居

シ今度是ヲ定盈忠正ニ添テ濱松ニ送リ山家三方ノ質

ト易ニテテ請フ神君即チ許容シ玉フ

天正元年四月十一日渡甲信ニケ國美上野飛澤各半國

ノ牧大膳大夫從五位下源晴信入道信玄疵痛ニ甚メ

再祭シ信列平谷波合ノ旅營ニ於テ享年五十二歳

ニ遺命ニ孫ノ信勝ヲ以テ家督トシ予カ歿スルニ三年

ノ間之ヲ秘メ病ニ嬰ト称シ勝頼陣代ヌルヘント云々

馬場美濃守信房ハ七百ノ勢ヲ八十騎ニ討ナサレ長

條ノ橋場ヨリ取テ返シ滝川城カ陣ニ驅ケ入テ討死ス

生年六十二歳即塙カ家臣河合三十郎首ヲ捕ル内藤

修理亮昌豊モ半途ヨリ返シ合セ攻メ戦テ討死ス北条氏

政ヨリ家康公ヘノ使者朝比奈弥太郎是ヲ討ツ

天正三乙亥年二月十五日神君濱松ノ城下ニ放鷹シ

玉フ路辺ニ於テ一童ヲ見玉ヒ其容貌尋常ナラス英勇

ノ相アルヲ以テ姓名ヲ問ル処并伊信濃守直満カ孫也後

守直親カ子万千代今年十五歳ナリ父直親ハ氏真ヨリ

死ヲ賜ノ後継父松下源太郎清景ニ抛テ當城下ニ蟄

居スル由ヲ答フ 神君且驚キ且ツ歡テ即日城上ニ
テ遠列 郡升谷ハ先祖累代ノ旧領タルニ依テ其
地ヲ賜リ升谷三人衆近藤石見康用鈴木三郎大夫
重路菅沼次郎右衛門定治且ツ木股清左衛門守
勝原治右衛門西郷藤左衛門ヲ輔臣トセラレ其
外与カノ士附属セラレ

天正三年五月十三日 信長并嫡子城介信忠以下東遷基業五万餘兵ヲ
帥ニ参列ヘ赴ント欲シ岐阜ヲ首途セラレ其後熱田ノ社
請セラレ神前ニ銅錢ヲ擲テ此度ノ一戦利アラハ皆ナ
メナルヘシト有シニ一錢モ文字無ク皆ナニ成シカハ合戦勝
利疑ナシト味方ヲ勇テ夜ヲ日ニ繼テ兵ヲ進ラレ

武田勢二千許ナリ然ルニ内々藤修理昌豊ハ勝頼遙ニ
落去ヲ見テ其兵百許ヲテ半途ヨリ引返シ敗兵ヲ助テ
戦ニカ大軍ノ中へ馳入曉勇ヲ奮ヒ從兵悉ク討死シ
吾身モ流矢ニ中テ馬ヨリ落ケルカ鎗ヲ取揚ル処ヲ朝比
奈弥太師恭勝是ヲ打捕ル

味方ニ三百騎馳来ル馬場氏勝カニ十餘騎是ニ馳合
テ敢ニ戦フ時ニ塙九郎左衛門直政カ從兵川井三
十郎馬場ヲ突伏テ首ヲ獲タリ此時氏勝敢テ兵又ヲ接
セス泰然トメ首ヲ授ク

今ナ一日知ノ刻ニ軍始リ未ノ下刻ニ終ル 徳川織田
兩家ノ兵首ヲ獲ル一萬三千餘級ナリ

天正六年三月七日濱松ノ城ヲ御進發掛川ノ城ニ至
リ玉フ今度井伊万代直政初陣タル故ハ菅沼藤
藏定政ニ命シ甲冑ヲ着セラル

八日 神君大堀川辺マテ御動坐銃騎ヲ駿州志田
郡田中ノ城辺ニ出シ闕シメ玉フ井伊万代于將十出テ
八歳ハ歳闕フ毎ニ衆ニ勝ル觀ル者英傑ノ畧也ト甚歎美ス

天正七年九月十五日濱松ヨリ服部半藏正成二股ノ
城ニ到テ 神君ノ命ヲ傳ル故ハ三郎信康君享年廿
一歳ニメ自殺シ玉フ遠列ノ住士天方山城通綱千子村
正ノ刀ヲ以テ介錯ス當城ノ山續ニ於テ火葬シ遺骨ヲ
瀧ノ上小松林ノ中菴室ノ傍ニ埋ム 勝雲院隆岩長越
居士ト号ス後此

地ニ清瀧寺ヲ建ラレ近世ハ彼寺産敷地村 信康君ノ女子
内ニテ六十一石ヲ附ラレ

二人アリ 後年小笠原兵部太輔秀政
本多美濃守定政ニ嫁ス 長臣榊原七郎

右衛門清政愁嘆ノ餘ノ禄ヲ奪テ其弟康政カ許ニ
蟄居ス 慶長十七巳年駿州久能ノ城ヲ五千石
ヲ賜フ其子若狭清定大内記照久ナリ

其後肥前ノ士ヲ以テ今度山城守ニ股ニ帯ニ行シ
脇差ノ銘ヲ尋サセ玉フ処ニ千子村正作ノ由ヲ
告セシカハ 神君聞セラレ伺公ノ衆ニ御誕ニハ以
前尾及赤山ニテ阿倍弥セカ乱心シ清康君ヲ殺害
セシモ村正カ作ノ刀ノ由聞傳ヘ又 神君ノ少年以
ル特駿河宮ケ崎ニ於テ小刀ニテ御手ヲ傷ラレシモ
小刀ノ銘千子村正ナルニ今度山城カ不慮ニ信康ヲ

介錯ヲ遂シモ右同作ナレハ早竟村正カ作ノ打物ハ
當家へ對シ不吉タレハ千子カ作ノ打物類ハ悉ク取
捨ヘシト御納戸ノ役人ニ命セラレシト也件ノ天
方山城守ハ御家ヲ出テ亡命シ行所ヲ知タル者無
キ処ニ程過テ紀伊高野山へ尋行キ天方へ參會シ
足下ハ如何ニ故ニヤ濱松ハ出奔セシヤト尋シカハ天
方答ルニハ谷モ聞及ル如ク遠及ニ股ニ於テ不慮ニ御
年少ナル信康君ヲ吾手ニ掛シ以來何トヤラシ述懐シ
万事心ニ深ズメ此体ニ及ヘノ種々辞ヲ尽テ問尋シニ
依テ天方告テモ詮無キ一也他言ハ無用ナリ吾等カ
御家ヲ立退シハ別ノ子細ニ非ス先年信康君御生

害ノ時御介錯ヲハ半藏ニ命セラレル処ニ其期ニ至リ
半藏大ニ戰慄メ其幾ニ能ハス君ニハ既ニ御腹ヲ
突セラレ御若痛ニ及シカハ吾等見棄テ御意ヲ伺
テ御介錯セシ事或時神君近習ノ士ニ御雜話ノ
時服部半藏ト呼レタル武切ノ者ナレ氏主ノ子ノ首
ヲ切ノ期ニ臨ハ腰ヲ脱シタルト有ル御意ヲ承リ然
ハ此山城ハ主ノ子ノ首切殊奇ノ様ニ思召入ラル、歎ト思
慮シタレハ寂早奉公トテモ入ザル事ト思ヒ究メケ様ノ
体ニ成タルト語リシト也

竹谷ノ松平玄蕃ニ神君ノ妹君ヲ賜リ妻トシ且ツ
御諱ノ一字ヲ授ラレ家清ト稱ス

大将ノ池田勝入ヲ安藤彦四郎カ鑓ツケタルヲ永升
傳ハ部スカサス鑓下ヲク、ツツテ切り伏テ首ヲ捕ル彦
四郎ソレヲ打捨テ池田勝九郎ヲ鑓ツケテ首ヲ捕ル彦
武藏守ヲ本多八藏カ討捕テ其刀取指等ヲ取リテ
白鼻ヲ搔テ来ル故ホ夕分明ナラス或説ニ武藏守寂
前ノ迫合ノ場ニ於テ鉄炮ニ中テ死スト云フ此ヨリ敵
ヲ追討スル一十八町首數一万余級ヲ得メリ味方ニ
大久保久右衛門長坂彦作藤井左助平升善五郎
安藤次郎五郎梶田彦七郎彦坂久藏佐野孫三郎
等ヲ初メ雜兵百三十六人戦死ス
今度軍功ノ者ノ品ニテ穿鑿アツテ先平松金次郎一番

鳥升金
次郎一番
鑓ヲ合ス

鑓ノ高名ニ加増ノ地三百石永升傳ハ部後右近ト号ス
此二千石安藤彦四郎後帶刀ト号ス此ニ五百石ヲ玉
ハリ其外ニモ皆賞祿ヲ玉ハル信雄申サルハ永升ニ五
千石ヲ給テ然ルヘシト云フ公ノ仰ニ吾カ家臣等ニホ
其如クノ褒美ヲ与ヘサルト宣ヒシトナリ右ノ平松金次郎
ヲ三好秀次ヨリ五千石ヲ与ヒ足輕百人ヲ預クヘシト招
クニ依テ領テ出奔シタルヲ公甚メ怒リ玉フ服部半藏
香村善七郎坂部次郎兵衛ニ仰付ラレ追ハシムルニ袋井
ノ宿ニテ坂部次郎兵衛一人ニテ討ツト謂ヒ却テ深子ヲ
負ヒ遂ニ金次郎ヲ討洩ラス
四王天又兵衛ハ前髪ニ白鉢卷ニ淡色ニ鶴ノ丸ノ大

四月。秀吉。進陣于湯本真覚寺。築石壁于松山。將軍家譜
外史石垣山下云
豊臣氏

護國公 池田信輝 常山紀談
此時古新と申は信輝政公 常山紀談

興國公 利隆 國清公
政房公光政
綱政より高天神落城及ふより八年北岡牢中

亦より甲斐北士横田甚五郎言天神よ来て在番せしが
大河内が節義を深く感へて神よ祈んころふいとありけ
て 東照之言天神を攻させりひて天正九年三月廿二日の
取城乃守將豊新丹後真幸横田甚五郎尹松相本市
々兩昌朝已下切て出岡部ハ討死し横田相本ハ切ぬけ
く甲府子落りたり城落れれハ石川伯春守教正城又
て政房を搜しおに牢中より幸久しく有て足痿れハ

むらまのせや 東照之言の御前ハ出に多年石の牢中を
一艱厄ふべくとも御後を流され侍をつらう刀照
差黄金を向へらるる政房生とこれ一事を口惜く思へる
色あはれこれハ人々敬の事と事ハ小笠原が不義に
し武田は降参せしあるれば何方のうまぬや 常山
紀談

謙信 天正六年三月 九日卒去
後武藏守関ヶ原ヲ討死 常山紀談

戸田半右衛門 信忠ノ小姓ニ職ニテ討 口

山口小守 佐々清花 口

黒田美濃守職隆 後宗圓モトマカと稱す 備前國福岡人なりしが播磨

の小寺藤兵衛政職（小寺）は侍（侍）と子官兵衛孝隆（小寺）と稱（稱）を共（共）に功名は
りて用ひられたり播州ハ其比所（比）と人々地（地）を據（據）り守（守）る軍
せしが小寺ハ五著（五著）に有て姫路ハ少敵（少敵）をかまへ黒田父子（黒田父子）に有て
秀吉（秀吉）よたのころ信長の旗下（信長の旗下）に属（属）り孝隆の子長政（子長政）其比ハ
松子代（松子代）といひし人質（人質）にして秀吉の居城近江の長濱（長濱）に
置（置）り此比毛利家の兵勢強（兵勢強）りし小寺約（小寺約）と変せんとい
孝隆此ハ然（然）る處（處）に信長物（信長物）わたり人なれども一旦天下
に旗をあげしころ未（未）ハ志（志）を先時（先時）の如（如）しき（き）に隨（隨）ひし
松子代（松子代）誠（誠）を悲（悲）しむるに非（非）たりしに免（免）せり小寺聞
ハて孝隆又宗圓（宗圓）は父子とも誅（誅）せしめぬべき密謀（密謀）を告宗圓
物なれし士五六人呼（呼）り河内（河内）の所存（所存）を問（問）ひ官兵衛五著（五著）はあら

己（己）が命（命）を危（危）かす處（處）に孝隆内（内）に諫（諫）ハたれとも予
も足（足）らずして姫路小寺（小寺）をあらんハ君（君）よりをひて非（非）は五
著小赴（小赴）うてカと盡（盡）し一（一）を公（公）にかなはざりて自害（自害）せん其後
人々心を合（合）せ又兵部事（兵部事）のひまをみる由決断（決断）せしむり
バ人々父子かゝ隔（隔）られむといひて只（只）病（病）とて五著の
奴原（奴原）に使（使）をよめ姫（姫）詣（詣）ひ欺（欺）くふとて只（只）討（討）ち来（来）らざ
かなし其後一戦（一戦）を遂（遂）て五著と打破（打破）るなり罪（罪）ありて討（討）ん
とする悪逆（悪逆）れ人天（人天）の咎（咎）なりんやとて只（只）討（討）ちし孝隆
各存（各存）する方ハ初（初）とてありしとも今病（今病）といはん子
實（實）とハ少入（少入）必主君（必主君）に叛（叛）ると人々誹（誹）られん予士（士）の志（志）は非
ハ君（君）に遠（遠）く名の入りたる忠（忠）の定（定）しきなりんハ運（運）の事

いんちきバカあししられん誅せらるるなりともいふを
ん此罪路をくりに取まらば天下の安危歳月を控まらして
定る處しとしてとある色のえんされハ宗圓家の恥
を思ひて身とすてむと之ハ定る事士の志なりとて五
著ふゆひて事かあるはずバ自殺やよろとの事ハ心安く之ハ
ハ忠の志をなぐふともわら叛くべしといひては孝
隆打らるるひささくはとて産殖立人々只今も一石さるれ
ての仰やを遺言よあらぬやあり一五著を難をのりきせ
戸とんハ其時々々五著の母を枕せんと誓言したり宗圓官
兵衛ハ安き情切せよ人々ハ人の志をせよと下知さるれし
らハ孝隆五著少赴かり宗圓足ねるなり子ながらも恥く一ハ

事あり先づつ履き親の留る子ハ死福といひてその口御ん
まわれとも君恩浅うらむと人ハ存るやあり今諛言を信
やらるるそ他ハ一ハ孝隆をやらせし引てより謀叛
一ハ命ハを一ハ物ぞとあるハ父の道ハ他となりと
身ハ殺すを取とあるさるなりとてせめくと泣きり
きるかたそ五著よりきりなり人々ハ今此路ハ引て
設るさる酒りり一ハ時々舞うて日をおくまとい
ひ一とそ孝隆ハ五著ハのきく心なく履き人々のせむ使
一ハ求め兼り者ありとて餐一のやうに語りて打
とけらるるゆありハいふはくはくも心の外ハあらんれ
ぬ事ハあら一ハいひあつ又此を控へ思田父子ハ

謀きくすし紀者きくすき士らきくす有り城はさるも用意
せん間少官兵衛を以て欺く慮るも計りくくくして地路の
根をさる宗圓金剛又帝まへせて打とけくする体るれはさ
くハ別乃事もあらじといつて此時攝州荒木攝津守村
重ハ毛利又属し信長と戦ひ利あらくして有岡の城
よひきくす此由山時園て孝隆をよびてこれ毛利よ
くくすつとハ内々荒木といつかくしける故あり今毛
利家よたよらんすはくろ過ちなりとさえゆるぞこれど
も此まきめて手きくれをせんよ表裏者といえれんも口を
しんれハさく有義よかひて荒木を存くも一関んを
秀吉よ謀りて信長と荒木和すといひゆし攝州信

長は従がくも真よ心をひるくして信長よ後あてとい
へハ孝隆あて信長と荒木と和平の思ひよりもめつれ荒木
厚く信長よ背すきくすバいつで其言誠信せらるるべき参りて
りともいいつら事あらん然もとも辞しやせの勇子に似
きりとい有岡よ赴く路姫路よまよりて父子對面し有義
ふるくハ必首をえのべきつおこて囚とくく二つの中よこ
ゆきし五著よ死んより有岡よて死よハ信長も少又世のなま
れともありいづしといひ切く色を宗園とて涙よむせ
せい志ぐし物ともいさくし一がやむかや誠よ困厄の
至極あらき名よかして身強すつるい義をさるありと
て又送るくハ孝隆有岡よ赴きり小寺兼て村重小密

よ毛利の一味とてさよ黒田父子人質の松千代を信長よせし
置きぬわかの又よ織田の内通の志はとて告せしせは
まば有岡の本丸よあひ入生とりて牢ふらぬ一こみ守り五
著よ此由聞えしつば小寺いつそりて齒うことゐし荒木が
狼藉の才才遺恨深し物事とも此上信長よ一味のこゑを
易く毛利よ禁し官兵誘を引くる謀や方べきといえせ
しつば宗圓怒りて髪を剃生どりぬちしつば是悲の論を
年をこころ身の子を失ふひ小寺ハ誠よ力か足ぬ方なり
物よ及多例をさくえん事いられぬ手に絶えとも先松千
代は信長よあしよ事ハ君も又臣父子と相計きし処よつて
今度官兵衛と方益よ捕へしつば是未の格よあふる處

ひさしおそろれ不交の人をちと棄ておしめたる
者をさすくなきハ逆ちよまや只物違ふ随て天北眞
見を待よ志がびられぬあつた時より度々の軍は修よ小寺の
家の危難を救ひ今齡かくふさたれに切つる長子代して
小寺ハ口をくくつども首をくくつるとも毛利ハ一味せよ
との仰をハ得兼らどとれ刀を抽さ誓くく事ハ使も言ふ
くつばアとまり宗圓が子ども五著を攻破らんといつとも用
ひバ村重心あつたつらるべしり一五著を攻ふ村重も
官兵衛を殺害さすしとてぬさゆりられよわくあそん
と思つ官兵衛が女房をバ潜ふ此比引とり置つりといふ
く氏村重ハ小寺よ孝みのしれと孝隆を生とりたまつとも

妻夢日輪入其懷。已而有身。天文五年正月朔。生一男兒。因名曰日吉。日吉生而英異。八歲失父。其母挈日吉。轉寄食邑人。邑人患之。同間有筑阿弥者。妻納為繼父。生一男一女。外史與國公。武名寺利隆於長の事。其時形貌と綿と凡 常山紀於秀吉尾張愛智郡中村。一名銀人。父曰弥右衛門。母夢日輪入懷生之。故幼名曰日吉。八歲而孤。邑人筑阿弥織田氏微者。謝病歸耕。衆因納為繼父。生一男一女。國史畧。安土後陽成院之御宇に於て大政大臣豊臣秀吉と云人其自微少起り古今に秀て宅に離倫絶絶り大器なり其姫也考泉子父尾張國重智郡中村に住人筑阿弥とて中ける或時母懷中より日輪入胎すと夢に已りて懷妊し誕生

一なるより童名を日吉と云ふなり 豊臣記

淳和天皇

藤原高房。魁梧多力。性無拘忌。天長中任美濃介。國史纂源師房。後三條帝在朝臣為右大臣大江匡房二人皆稱賢方論

權中納言藤原長方 安徳帝在朝臣仕法皇と後白河

山背王 豊聰大 聖徳太子ノ事

中大兄皇子 天智天皇ノ初葛城皇子舒明天皇子

蘇我入鹿 皇極天皇臣

馬子弒 崇峻帝

菟道王 菟道稚郎子仁徳帝弟

孝徳天皇之立也。投書於匱。撞鐘告許。許。

任那國ヨリ使者来テ貢タテマツル此國ハ三韓ノ内ニ在リ異國ヨリ

貢ヲ献スルコト是ヲ始トス
小碓尊ヲウツノ 日本武尊ノイ
大連ハラシ 任那国之別種也
国史畧曰西海之夷。国在雞林西南。

億計

仁賢天皇市辺皇子ノ子市辺皇子ハ倭仲天皇ノ子雄畧

弘計

狭手彦カ妾欽明天皇ノ臣狭手彦ハ伴金村ノ子

松浦佐用

膳臣巴提使 欽明天皇臣

大海人

天武天皇ノイ 土師宿祢

穴戸

長門 和銅四年大安麻呂古事記三卷ヲ作ル 王代一覽

采女

其所ヨリ然ルキ女ヲエラミテ宮仕セシムル云フ

天平勝宝

六年学生阿倍仲磨呂留仕唐 政記

神護景雲

元年七月僧勝道始テ下野国ニ荒山ヲ開ク 王代

抑壬申ノ乱

ニ大友皇子討レテ天武即位アリニカハ天智ノ子孫ハ

衰テ微ニナリ

ニ至リテ天武ノ王孫ハ却テ絶テ天智ノ嫡流王

天平寶字六年二月押勝三位授ノ頃日弓削道鏡ト云僧孝
謙ノハ近侍ノ寵愛更ニ天皇然レカケテ不謙ナリ
稱徳天皇即孝謙ナリ

延曆十三年遷都於葛野郡宇大邑。營宮城。課諸國造宮門。
殿富門 美福門 安喜門 偉監門 藻壁門 待賢門 陽明門 達智門
談大門 郁芳門
冬十一月車駕遷新京。詔曰。此地形勝。山河襟帶。自然成城。宜
改山背為山國。士民謳歌。稱曰平安。宜從之。 政記

大同三年五月出雲廣負ト云官医大同類聚トイヘル書一百

卷作四ノ献ル一覽

弘仁六年夏令畿内外諸國植茶 政記

同九年四月内裏殿閣御門ノ額ヲ書改ム北面ノ額ハ宸筆ナ

リ東面ノ橋逸勢コレヲ書南面并ニ於大門ハ弘法コレヲ書 一覽

左少将良岑宗貞コト云近臣在ニヨリテ髪支ラソリテ僧トナリ名ヲ遍

昭ト改ケ一覽仁明天皇ノ臣

鴻臚館ハ玄蕃寮ナリ異国人ヲ置所ナリ東寺羅城門ノ辺ニアリ 一覽

仁王經

前參議藤原實盛

北條義時雖遷官猶稱原銜 政記

斫 耳アス

慙

閫

詒

燭

堦ハテ

泥塑

艶妻中夜之泣 纂論

狷 覲

関東廂番

藤原實世建言宜誅戮直義以絶患左大臣藤原師基等

議謂直義降則尊氏可平 纂論

皇弟輕 即孝徳天皇

法興寺 寺在大和国飛鳥邑南

園延城寺 三井寺ノ一

使小山田昌行當長篠 纂論

信孝母質在清洲秀吉怒磔殺之

織田氏脂韋柔懦信其穿鼻

關 アラハル

年 ウツ

樹 ツ

軍 ヲヨフ

聲 サス

風 シラカサ 露 シラカサ 沐 シラカサ

嘗定憲令五十條謂之貞永式目 泰時

持明院上皇 後 天親 帝

大覺寺 後 宇多院

豐仁親王 後 伏見帝子 光明帝

足利直冬養於叔父直義 直冬 尊氏庶長子

青山延于曰長尾景仲上杉氏之謀臣以智略見稱于世

義教如其殺一色義範而奪其妻暴亦甚矣且如教持

氏而及其幼子。究索其弟義昭而必殺之。亦何残忍也。

義政造第於東山居焉。勅賜号東山殿。使狩野祐清。畫滿

湘八景於殿内。

三浦 義鎮以龍陽之選。逞柔曼之態。

光秀逃酒

信長。賞市人宗運之至孝。嘉鹽川國滿之政績。

為人作嫁衣

自三原徒豫地又接紫海

天正中織田信長以秀吉為大將以擊毛利氏賜雨傘

馬標云 纂論

世傳當時或榜於道傍曰。奢者不久。太閤見之。令大署其

傍曰。不奢者亦不久。

基經ハ良相ノ養子ナリ後ニ昭宣公ト申セシ人ナリ 一覽

大政大臣從一位藤原良房薨ス年六十九正一位ヲ贈ソ

美濃公ニ封シ忠仁公ト謚ス日

孫兒拳

以テ異ふる事モ無クリヤと同ヘハ今年ハ例ヨリ青頭菌多ク

出テ梨李桃帰リ花多ク閑き地震スリ十日許前ヨリ雞埒小

棲モテ梁小上リテとふかく小困リと云リと不利根川圖誌

注連 トリニ 獨鈷 トリニ 椀 トリニ 關伽

蠅頭細書

道興准后 後知是院関白左大臣房嗣公ノ第三子

小田宰相將治

淡海大津 天智天皇

根本禪寺 推古天皇北勅額祈禱此二字

人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未歲二月 息洲神社

鱧魚 鱧 海燕 ウミトビ 海猪 ウミイノシロ 鱒 マス 腹赤魚 ハナハシ 鮭 サケ 本義ハ

小々妻茅に似テ小ふリ原野湿地不生ず葉中小脊あり長三

尺許秋枯る採リテ蓑カサ小製衣カサ一名ササ草卷九郎

再雅義疏の類絲延ハ不ハリ

義綱 加茂二郎義光之兄源平盛衰記云頼義カ子ニ美濃守義綱

義忠 鹿嶋三郎。義家之二子甥齊按義忠非鹿嶋三郎

稱德帝 後白河天皇ノ條甥齊按孝謙重祚ノ名之ハシ

法皇

後白河法皇建久三年三月崩壽六十六歲

淨海

實白河皇子建久二年

雍熙之風

輓軻

不得志也

永萬元年七月二條帝崩

國史畧下同

當時錄倉奏請以皇統分為二流龜山後深草二帝子

孫五登 天位

詔義貞奉皇太子良專勾當軍國事

有小山田高家者馳至使義貞騎已馬而逸自拒賊兵死之淡川

義貞會疾江田行義大館氏明助馬等先發 兵庫

宗良親王入尊澄親王還俗之若

ツニカ

按スルニ此病和蘭ニテシケウルホイトイフ病ハ其書所載ノツニカノ病ト符合セリ是醫宗全鑑ニ出ス所ノ青腿牙疳ナリ 環海異聞

天文七年秋七月小田原氏康与山内上杉憲政扇谷上杉朝定大戰克之殺朝定降憲政兩杉遂衰 國史畧川越

浹旬

枝梧

元春之智元續之愚皆可謂無准

秀乃吉言

元仁元年夏北條義時為近侍所殺

六月小近習比深見三郎と云侍
小六十二歳中刺殺されり
と保曆間記了見元毎り王降

糲燒稻作米也。早眠切集韻燒稻取米曰糲。

旁死魄 三日

既生魄 十五日

再生魄 十六日

嘉元三年北條宗方殺其族時村 國史畧

注。宗方時賴之孫。負時從弟。而与師時爭權。師時与

時村親睦。故欲先殺時村。後害師時。矯將軍命募

兵。乘夜襲殺時村。負時怒。使其族宗宣等討宗方。

宗方防戰力盡自殺。負時悉誅餘黨。

花園天皇 又稱 萩原院

元應二年陸奥安藤季長与其族又太郎有事爭訟錄倉。

高時家人長崎高資納賂不決。二藤怒戰于其地。高時遣

兵討之不能克。二藤始叛錄倉是北條氏之陳兵

是月元弘帝潛出隱岐

注。賊黨佐木富士名判官義綱。時為行在所護衛。一

夕忽欲歸順。勸帝出隱岐。帝賜以宮女。

建武元年八月有鳥人首蛇身夜鳴紫宸殿屋上。廣有

射殺之。二條関白家隱岐左衛門廣有

明德二年十月山名時熙氏幸等潛入京謝罪。幕府義滿欲

与氏清議而赦之。氏清會請義滿觀紅葉於已所築宇治

別墅。爾日氏清聞其欲赦時熙等而不喜。稱病不謁人

皆驚其不礼。氏清者山名

忘永二十三年十月。大納言義嗣作難。欲奪其兄義持職。謀泄。義持怒。使兵圍其所居北山第。義嗣削遁亡。二十五年。義嗣遂為其兄義持所戮。

樵談治要 関白兼良著

天文七年冬十月。氏康与里見義弘戰于鴻臺。敗之。政記

永祿六年正月。北條氏康与里見義弘戰于鴻臺。敗之。日

謙信召諸將。謂之曰。天文丁未之歲。余年甫十八。信玄二十七。初與搆兵。每為彼據勝地。不得逞一戰者。十有五年矣。畧

倉雞 倉 雞

神功皇后

大和國遷于般余稚櫻宮。御座又忘神天皇

八同國輕嶋明宮。栖也給。平家物語都遷

百萬遍佛寺 今ノ智恩院

柴漬

漁獵之具。又青柴垣ト云フ拾遺集ニ平兼盛哥ニ

賀夜奈流美神 言代主神此亦名

神壽詞 幽冥事 顯明事 御託 天皇祖神

水漾液 水晶液 硝子液 眼ノ三液

奥刈角田赤松休本 眼料

清涕 參蘇飲ノ條

竹葉椒 蕃椒ノ一

離魂病 辰砂ノ條

鬼方 既濟九三高宗伐鬼方

術水 呪術 小縁 恩頼 鞞 諦 誑言
久須理 久斯と約ま里久斯ま、伎と約まる故子酒字伎と云
御酒 黒酒 白酒 云ふと云ふぞ知へし 玉女まき

御娉 移落 堅石 差別 望 王 坐 毒害

能褒野 尾刈 枚岡 河内
尸解 赤縣 太古傳及比志都能石屋了説と見取

源敬公 尾刈 東照宮御幸譜御作者

素盞 鳥等 須佐之男命
詔 神託 論 詩 本居 醜目 漢 現国

大麻 皇神 眼耳鼻舌心意 大詔 酒祭 賀之同

六根清淨後 古の物子非中佛經此意を取て吉田家にて作る物不

道郷食 太北 乳速 招事 禍事 手次 解

虚見津倭國 火産靈 天 鈿女 四句 衣筒 鎮魂

茅纏 汗気槽 神惠良伎 姑獲鳥

宸襟 豆 魔 雞 詠 腕 無 男 定雄

下總国香取郡松沢村宮負定賢

小子部 栖輕

櫻大刀自神

現人神

豫美回

夜見回

天皇

芻靈

論

多

佐備

天竺了謂ゆる障礙神の一名を荒神と稱して

爾前經とて誹れども 大日經命祇經

川菜 いるもと云ふ物なり漢名を天董竹

坐摩北御巫

術出し

珍子

宇斯のまね賜へ

屎尿

岡部参四政成 後改衛士真淵三引濱松敷知郡

秋津彦美豆櫻根大人

鈴居本居宣長謚号

板本 五代の時子始めて印行ありしと

粘著 綿密

胸乳字の記して保登小裳紐をおし垂れて股乳と

詠しと戲言ありしと

他此善を取つて已り事と為さる盗中云ひ人此非

とありて其善を蔽ふ我賊と為は中云ふありし

吾名兄命

那邇妹命

陰馬藏

陰菜

元靈

現心

天瓊戈

小縁

毘婆尸如来

尸棄如来

毘舍婆如来

拘雷孫

如来

拘那含如来

迦葉如来

釈迦

以上七佛釈迦を當せ

在れを過去と云

牛糞。牛尿。蜜。酥。酪。五淨

古學巫俗徒了益荒男此形此俗す水さを知らず有

倭文

れや手弱女もはる歌あみえふ

賽謝 強頼言 假令 高虚 鎮坐 見任

圓大臣 大草香ノ皇子眉輪手乱眉輪手葛城山大臣力宅ニ逃隠ル

真鳥 武烈天皇臣

守屋 用明天皇臣

入鹿 皇極天皇臣

長 ありの大臣

金村

蝦夷入鹿ノ父

於呂舍国 往坐 勤 國 御 心待 差別

吉備武彦命 日本武尊臣

吉備津宮 妹尾太郎兼康 度會彦草神 安徳天皇 寿永二年

内親王 土主 志幾小到至て舊市邑

小石川戸崎町小石屋長左衛門と云ふ石工巧りて其弟子

子丑之助と云ふ若者何里

傳通院北多久藏主稻荷神

神籬 復輿 許袁呂 万葉加袁理 真福 祭

宸襟 魄目 詰詘 朴畧 齊藏 差別 称

大宮能賣神

寄咩神是也酒造ノ神矢之波之伎神とも

無躬 国造

蘆薈

錯

鼠婦

本地無跡

削 了く出俗見越入道

精氣為物遊魂為変

神實

利

坐摩手

水取

御水

荻 大御綾威

幣帛

和幣

傷寒論子大便を清便とも有

長は女子にて此女子ハ同社正官西羽倉伯耆守上北面室と

ふれ其生くる女子を真崎と云

ふと和けよ倭りハあらぬ漢島の跡を見るのみ人の道うを

渡辺蒙闇

小田穀山

兼山門人

天勝国勝奇異十憑毘古命

篤胤私り其名を奉りて

索吾

神代畧記

西田氏

参考神名式

篤胤

童蒙須知 朱子

書史金日要

古史成文三卷

篤胤

同入学門 篤胤

毎朝神拜詞記

篤胤

八重多川お孝八重地つまおめお八重地つくるお八重

地を

推古天皇紀十五年七月庚戌大礼小野臣妹子遣於大唐以鞍作福利為通事隋之古遣唐使始也

西籍慨論

取戎慨言

逸史

鴨祐之

歴史徴崎松

参考神名式

篤胤

祝詞宣命国引の故事世記の文水取の故事の文の如くあるが古の書法あるを次々漢文に物記にこと弘くあるを多し歌祝

詞宣命ふととの古風を存して書こころあれること知後
右玉多事記

内侍所と申は伊勢の大御神に御霊を禁中よと祭
らせ給ふ御所の名なり

伊邪岐大神はちり天照大御神を生給ひ天日の御國
を治し食し給ひて

大御神に御孫天津日高彦火瓊杵命天よりて天皇命
の御位より即け奉り給ひ

仰ふ此通に藝命と申し奉る御父神を天忍穗耳命と
申

此忍穗耳命の后神を皇産靈大神の御女栲幡幡マクハタタ比賣
命と申し神に生坐せる玉依毘賣命

天降り給ふ時を適に藝命の中ヲサナ幼稚く御枉せしを天上
小枉せる神の殊り卓れしを盡く附属の方マトコラスマに眞牀衾

と云ふを覆ひ奉りて御許成放ちて天降り給ふなり
延喜神祇式にも載られし派が寺を尾苜塔を阿良岐佛

經を深紙齋トキを片膳僧を髪長尼故女髪長佛字骨とも
中子也ミナ立須久彌とも云ひ替て佛語をいみ伊勢比神宮小

は僧尼の拜所也て宮前前より遠く傍小まうけ置きて法
親王と申せども其所より御拜あり

八十入滅と云ふ御國にては懿德天皇の二十五年と云ふ年也
りありを周敬王三十四年と云ふ年子當れり

藤原の都子人磨也一平城北都子赤人也一出られ一
大國主神盤葉の道と禁厭の方とを始め殊小大國主神を幽
事を主多るい

思ふこと一於叶へをおさ一つ二於三川四於いつく止れむ
をかみと云ふ語此義を古説小折屈此略詞なり

古祝詞には有年乎婆也云ふ例にて有ふむはと云ふ
伊邪那岐命左右の御目より天照大御神と月夜見命とを
成給ひて

高天原と云ふを即その天日此御國を白せり

高御産日神産日二神をよ白せる皇産靈神二柱了坐マと云
も更ふもが

伊邪那美大神その國子到り坐て彼處小永く御座坐事母
定れりよ此神を豫母都大神と稱コラせるが後小健速須佐之
男大神此國字所治食して月夜見命と御名了負坐マせり
を其より後を此大神を彼國此君は御坐りる

速須佐之男神此保食神を殺し給へる耳於らま甚く荒ひ
て高天原を騒動し給ひ

十四代崇神天皇の御代母至りて大御神の御誨ありて天皇

小も御同殿小坐こを畏く思召され彼石凝度賣命此子孫小
別子かの神鏡此形を模造ウツシツクうしめて御代とあされ豊鉏入比賣
命と申に皇女小戴ミ奉ウしめて大和國此笠縫邑ミ云小地小
宮を造り齋祀奉ウゆる小其地を神慮小應は文と御誨しミ
是小令りて次此御代牟仁天皇此御時小倭比賣命と申に皇女
丹戴ミ奉ウしめ

少て外宮小鎮座ミに豊宇気毘賣神を申に伊那那岐伊那
那美神の御子火神迦具土命ミ土神埴安姫命ミ此御間小生
坐ミる稚産靈神ミと申に神の御子小坐ミる
飯を以古くも給ミぶと云ひ女の言も給ミるを云ふ其を神と

丹戴ミ奉ウしめ義あり

伊勢新嘗祭九月十七日

椀ミ

今此外宮小御鎮座より以前を丹波國比沼此真名并
とふ所ミ坐ミるミ四百八十四年のち雄略天皇の二十二年と
ふ年小天皇の御夢小大御神此御誨ありて
山城凡土記小奈伊呂具云ミひ一人此地小稻梁を作りて
富祐ありて故り祭りて社名と為ミるミ見え

豊宇気神ミと稲穂字積入れ置く倉を云ふ
御食都神ミとも申に故り古書とも小三狐神ミとも書ミる
字在人心得ひがれて稻荷社ミ坐ミる三座の中ミある大宮賣

命は天照大御神の御前侍ひて事執り給ひし神あり
故小專女と申せし所とを混して稻荷神を狐ありと言ひ
茶耆尼天 妖狐の梵語
黄女
主神カムザネ

天地此神の恵み無りせん一日一夜も有り得ずぬ
外宮此神を天照日此神の御食此大神
抑此の二神の生出はせる本は伊邪那岐大神の火産靈神
字斬給ひし時小石御刀の刃より垂落る血大小激上りて
安河原ふる石群と化れし小石其鋒より垂落る血その石群
小激たぎて磐裂神根裂神と申し男女二柱此神成出ば
此二神の子小磐筒之男磐筒之女神と申し二柱所り香取

宮の海馬経津主神を即その子なり海馬此時小伊邪那岐
神の御刀此鐔より垂落る血もその石群小激たぎて癩速
日神と申し神成出まし其子小燐速日神と申し神なりて
鹿嶋宮の海馬武甕槌之男神は即その子なり
伊都之尾羽神 伊邪那岐大神の御刀の御霊此名
時小八百萬神をぬ集へて葦原中津國をいそぐ喧まて悪
神多し誰神字遣して平治めむと問給ひしは八意思
兼神の語小伊都之尾羽張神の子武甕槌神志る語然
れと彼神を天安河此水を逆小せ居れば他神を也記得し
天迦具神こゝ往得ぬを白し給へば其神を遣しける尾羽

張神畏まりて武甕槌神を進れり小経津主神と共小天降
して此御国の惡神ともを平しめ給へり

爰小二柱神天降りてまた大國主神を皇美麻命小國避り
讓り給ふはく和し治免給ひ大國主神の御勧めに従りて岐
神字郷導と志て堂火不古光神五月蠅ふに荒振神ともを神
攘ひ拂ひ斬戮り於國內盡く見巡り磐根木立草比葉
青水沫おもも語言しむる妖鬼ともをも皆悉く外國より逐攘ひ
て葦原中津國を平竟於由字復命申さむと白雲小乘りて
天小昇り給へ依處を常陸國信太郡ふり是字もて常陸國よ
武甕槌神の宮なり國は異れと間近く下總國上経津主神

宮あり

息例

此字鹿島と思ひ誤りも有りて夫木集長能の哥よ神さぶ
ぬかしはを見まを玉おれのおが免をうりてせう此小まら
うて杵築宮とふは即謂ひる大社なり柳太の大社り鎮座
大國主神と申には速須佐之男大神此奇稲田比賣命小御
合おして八嶋篠見命まのるを八束水臣津怒命を生し免
給ひ此神の御子小天菅根命なり大國主神を即此菅根命
此御子なり御母を刺國若比賣命と申せり柳須佐之男命
かの石屋戸此事をみて後小十座置戸の被ひ事小ありて御心
清く志く水給ひて高天原を降る海一天此壁立ち起り外國

こを見巡り出雲國小還り著給ひかの手摩乳足摩乳ヲ請ひ
の隨小八俣此遠呂智を斬りて所思に天村雲此神劍を得
ましむ此御子御孫ふとの國作里給ふを見立て年久しく此國
小御坐せるが加此神劍を以御孫昔根命字天上小遣りて天照
大御神子献里給ひ御曾孫小大國主神生坐て後子豫て所思
せる如く根國子入坐せり紀

須佐之男大神此坐に根國子到坐してその御女須勢理毘賣命
字御妻と志て

かくて世の人種此便とふる事を種始とすひ大八嶋國の大國
主と志て出雲國子御座る小天照大御神皇產靈大神此御命

元正天皇養老四年舍人親王上日本紀

允恭天皇七年以衣通納宮

觀心元兼好病氣和氣清光ヲ教テツカワサル 北窓瑣誌

もて天穗日命あす武甕槌神經津主神ふと遣りて大八嶋國
を治むる顯明事を皇美麻命小讓りて幽冥事を治まへさ由
字詔一の殊小重く御つらひ有しは此御國字皇美麻命小
奉りて須勢理毘賣命と共小杵築此大社を本宮と定めて無
窮小幽冥事あらし者其事とは成り然是時よりて顯を
し免て別をらる

かくて大國主神の本體を天津神此詔命の如く加此杵築

大社小鎮座してあう歸伏カミヤませる事の由なば和魂大物主
 神が天より参上りて白し給ひ此特にも八百萬の国神
 を帥て昇り給ひ無窮小幽冥の事掌ウケし給へ有る国神
 此酋と坐せば大物主と申に御名は此時小皇産靈大
 神の賜へる名るらむと云れしは實然る語なり大和国城麻
 此葦原中国者隨命マキ既献焉と白して事代主神と申に名の御
 魂を宇奈提社ウナテ小坐せ高彦根神と申に名の御魂を葛城社
 小坐させ賀夜奈流美神と申に名の御魂を比鳥社ヒトリに坐せて
 皇美麻命此近き守神を献置して遂に現世を避奉り給
 へる事と上件小説なるが如し

戸石合戦

天文十五年三月攻戸石城村上義清將兵六千
 来後我先鋒カミ甘利備前横田備中等皆敗死
 天文二十三年信玄与小笠原長時戦于桔梗原二二二

桔梗原

鳥井峠

天文十四年典小笠原長時及伊奈氏

塩尻

三増峠

永禄五年十月

松山

薩摩山

永禄十一年十二月信玄与氏康戦土年八清見寺ノ戦トス
 皇朝史畧作十二年春正月

櫻井

泉州大坂夏備前
 瑞龍寺二の丸小先登し岐阜合渡

星崎

天文十五年四月廿日 河越夜軍

天文十一年

東照宮御誕生

永祿二年

大高納糧

同三年

桶峽

同六年

一向僧乱

元龜元年

姉川之役

同三年

三形原

天正三年

長篠

同十年

天目山 本能寺 堺御危難

同十二年

小牧長湫

弘治元年十月十日 藝州嚴嶋

永祿四年三月

殿

謙信圍小田原 退軍 新散田 治長年少

神之御尾前ミササキとは師説小天神御子ミコ帰順奉仕ヨリツカ諸神をいふ

く指て云ぬ尾前を前後と云う如く俗に跡前と云ふも同し

其は万葉集小想は思を想ふと云はる真鳥住む卯名手此社の

神し知さむと詠る哥も宇奈提社を言代主也申に名此御魂

を志て能く符芳流を思ふはし

天皇祖神との詔命よりて皇美麻命は顕明事字をうし

者し大國主神を幽冥を志るし者は事と分定ありて

伊邪岐大神の火神迦具土神を三段小斬給ひし其一段小坐生

世依大山祇神の御女不依が弟姫字木花之佐久夜毘賣命と

申す

迹：藝命穗：出見命昔不合命御三代の年數を日本紀了

一百七十九万二千四百七十餘歳也

倭比賣命無仁天皇此御女也景行天皇の御妹小坐

天目一根命天津日子根命の御子小坐一照大御神の御孫

石凝度賣命也天照御神の御孫天照國照彦大明命

建稻種命尾張國造其娘宮篁姫其臣久米八腹

御病の甚急ある時小袁登賣能登許能辨爾和賀淤伎

斯都流岐能多知曾能多知波夜

寬政八年此事あるが但馬國竹野北濱

家も才も國もけうに不穢は神のいみ坐にゆるる罪を

稿

施

奇靈

日絲

御託宣

跡 俗陰 跡 俗陽 案 実 密 寶 日絲 顯 幽

伊都速^{イヅハヤ}神は火神と称して誰神^{タニカミ}有らむ其は此神を
祭^{マツル}る詞^{コト}小御心^{コミココロ}一速比^{イツヒ}給波志^{タマハシ}止^ト為^シ豆^{マメ}云々有^アとも思^{オモ}ふ所
此神伊邪那岐大神小斬^{コトコト}られ給^{タマ}ふ其御體^{ミミタマ}ハ天上^{アマノ}小騰^{コトコト}
里^{サト}香山^{カクヤマ}と化^カれるふと玉^{タマ}真柱^{マキバシ}も云^{イハ}る如^{ごと}くふれ^レる其御雲^{ミミクモ}
やぐ^{ヤグ}彼山^{カノヤマ}小坐^{コイマス}お^シて市^{イチ}千魂^{チマタマ}命^{ノミコト}ハ其御靈^{ミミタマ}北^{キタ}御子^{ミコ}小坐^{コイマス}と
聞^キえ^{タリ}

津速産神^{ツスハタマ}疑^{ウタガ}ふ^ク火産靈神^{ヒハタマ}云々

古史神武天皇卷^{コシカミヤマト}に載^ノせる此神の御灵^{ミミタマ}火^ヒ雷神^{カミナリノカミ}の丹塗^{ニヌリヤ}矢^ヤ小
化^ナりて建^{タケ}角^{ツノ}見^ミ命^{ノミコト}の小女^{コメ}玉^{タマ}依^ヨ思^{オモ}賣^ウを孕^{スガ}せて鴨^{カモ}若^{ニガハ}雷^{カミナリ}命^{ノミコト}を
生^ナし免^メ給^{タマ}へる故事^{コトワザ}字^ジ思^{オモ}ふ所

かくて此香山^{コノカクヤマ}を後^{ノチ}は^ハ大和国^{オホヤマト}小^コ天降^{アメノリ}給^{タマ}へる^ル神武天皇^{カミヤマト}の磯^{イソ}

城^{シロ}八十^{ヤチ}建^{タケ}を誅^ツし給^{タマ}ふ時^{トキ}了^{マツル}天神^{アマノカミ}の御教^{ミメシ}坐^{イマス}て其香山^{コノカクヤマ}
埴^ニ取^トりて嚴^{イツ}笈^{ハシ}を^ハ作^{ツク}りて^ハ用^{ヨウ}ひて神^{カミ}を祭^{マツル}り給^{タマ}は^ル虜^{ウラ}とも
平^{ヒラ}伏^{フス}ふむと御勅^{ミメシ}ありて其神^{カミ}勅^{メシ}のま^ま物^{モノ}給^{タマ}ひて虜^{ウラ}
を^ハヒ^ガう^ク其神事^{カミコト}に用^{ヨウ}ふる大^{オホ}を嚴^{イツ}迦^カ具^{ツグ}土^{ツチ}と号^{ナヅケ}け給^{タマ}へる^ルれと
恙^{ヤサシ}く石屋戸^{イシヤド}段^{ダン}の故事^{コトワザ}ふ^タり

大和国^{オホヤマト}十^{ジュウ}市^シ郡^{クニ}子^コ天香山^{アメノカクヤマ}坐^{イマス}櫛^シ真^{マコト}知^チ命^{ノミコト}神社^{ヤマト}

